

自由進度学習

2025・12・10 重枝 一郎

「人は誰もが天才だ。でも、魚に木登りをチャレンジさせ続けたら、魚は自分のことを無能としか思わない」。これはアインシュタインの言葉である。私たちは、本質的にはお互い異質である定義できる。その異質のたし算は自身の可能性を広げる。この「異質のたし算マインド」は、「受け入れる力」である。私は、異質のつながりで生徒・教師の可能性が広がる学校づくりを目指している。

さて、「自由進度学習」という言葉を聞いたことがあるか。別に、新しい言葉ではない。1980年代に教育界で言われていた。「自由進度学習」とは、生徒が自分のペースで進める学びのことである。ゴールを設定し、生徒が自らの学習計画を立て、自力で学びを進める。各教科の授業では、ある単元の中の途中で、この「自由進度学習」が行われることが多い。これを「単元内自由進度学習」と言って、昔からこのやり方はある。私自身、以前、ある単元の中で、教室の中を、数学が苦手な主に個別で進める人は前の席、どんどん進めたい人は後ろの席、真ん中あたりは話し合うグループ etc と、教室を生徒の希望でオーガナイズし、難易度別のプリントを用意し、取り組ませていた。実は、本校の先生方もこのような経験を持っている人がいるのではないかと思う。私の当時の最上位の目標は、「意欲からの落ちこぼれを生まない」という言葉で生徒にも伝えていた。今で言うと、「自律的学習者」に置き換えられる。

近年、「自律的学習者」という言葉は、教育分野でのキーワードになっていることから、最近、「自由進度学習」は注目度が高まっており、増加の兆しが見られる。

なぜこの授業スタイルが注目を集めているのかというと、学校の授業スタイルを変える必要性が高まっているからである。文科省が目指しているのは、子ども一人一人の興味・関心や発達の状況などを踏まえ、それぞれの個性を伸ばし、生きる力を育む教育である。だから、今の授業スタイルでは、その教育を実現できないと言われる。このような考えは、これまでの学習指導要領にも書かれていたが、2021年に中教審がさらに踏み込んで示した「令和の日本型学校教育」の中で、「個別最適化な学び」というキーワードを掲げた（校長研修だより87号「令和の先生」）。その実現に効果的な方法として「自由進度学習」が注目されている。

この「自由進度学習」の経験がある先生は、その学習をする際、どんなメリットを感じ、取り入れたのだろう。想像すると、生徒一人一人の学力の違い、特性に対応しやすい点があると思う。また、生徒一人一人の理解度を把握しやすいという点もあるのではないかと思う。私自身は、このことに加え、学習意欲が高まりやすいということを考えていた。いつものルーティンを崩し、気分転換みたいなノリもあったかもしれない。

その時の生徒の様子としては、わからないことを取り組む姿勢がいつもよりよかったり、他者と比べて恥ずかしがったりする生徒もなく、理解がはやい生徒は次への意欲が高かったり、こっちのプリントの用意が間に合わなかったり・・・一人で取り組む生徒、友だちと取り組む生徒、バラバラでありながら、一体感のある学び場ができた印象である。

しかし、やりながらの不安はあった。それは、何とも言えない自習時間のような感じにならないかということである。「教科指導と生徒指導の一体化」の話はよくするが、やはり、授業の基礎的条件として、学級経営の安定や教師との信頼関係は大切になると思う。